

原 著

## 要介護高齢者の気遣いの世界 — 祖父母的ジェネラティヴィティの源を探る —

新木 真理子\*      神谷 英二\*\*      東 玲子\*\*\*  
吉原 悦子\*      丸山 泰子\*

### ＜要 旨＞

本研究は、祖父母的ジェネラティヴィティの源を探究するために、要介護高齢者の気遣いの世界を明らかにすることを目的とした。本研究は、ハイデガー (Heidegger M.) の解釈学的現象学を基盤とした質的帰納的研究である。介護施設入所者への面接を通して得た情報を、Cohen の分析ステップを参考にして分析し、7つのテーマが導き出された。要介護高齢者の気遣いの世界は、長い生活史を経て、人や社会とのかかわり合いによって形作られた固有のありようを示した。

キーワード：気遣い、要介護高齢者、ジェネラティヴィティ、解釈学的現象学

### I. はじめに

人は生涯発達していくという生涯発達学の見地に立つと、歳を重ね、たとえ要介護状態になろうとも自我は発達していくと捉えられる。自我発達論を唱える E. H. エリクソン<sup>1)</sup> は、成人期の発達課題である「ジェネラティヴィティ (generativity)」は、老年期に「祖父母的ジェネラティヴィティ」として発達するという。「ジェネラティヴィティ」は、自ら創造性・生産性を発揮して、周囲とかかわり、次世代に向けて、他者や世界に知識の伝達や貢献をしていく関心や態度、行動をいう。しかし高齢者は一旦要介護状態に陥ると、人や社会とのかかわりに制限や制約が生じ、ジェネラティヴィティの発達も阻害される可能性が高まる。要介護高齢者が、たとえ次世代に向けた関心や世話する意欲を持ったとしても、人や社会とのかかわりが乏しく、身体も不自由な状況が続けば、それが他者への具体的な世話行為に結びつくことは困難となる。しかし、老年期における他者への貢献は Well-being の要因となり (Kahana<sup>2)</sup>)、自らの有用感はその後の生存期間を長くする、人への手助けが老年期の喪失を乗り越える手立てとなる (Bickerstaff<sup>3)</sup>) 等の調査結果がある。

要介護高齢者にとっても、人から世話を受けるのみならず、人に役立つ、人の世話をする要素が日々の生活に存在することは、大きな意味をもつ。McAdams<sup>4)</sup> は、ジェネラティヴィティの動機に結びつくものの一つとして、「必要とされるニード」を挙げる。要介護高齢者が、心身の不自由さを抱えながらも、自らの手で他者の世話を行うことには困難を伴う。しかし、要介護高齢者は長い生活史のなかで、人や社会とどうかかわり、「必要とされるニード」をどう育み、現在を生きているのかをケア提供者が掴むことで、要介護高齢者のジェネラティヴィティ発達への支援に結びつけることが可能である。ただ、要介護高齢者の「必要とされるニード」は、個々の生活史のなかにおける人やものとの独自のかかわりのなかから浮かび上がるものであるから、限定された問いに答える形では明らかにすることはできない。ハイデガー<sup>5)</sup> は、「気遣い (Sorge)」という概念について、これは自己・実存の核心であり、人間は自らが最も固有な存在し得ることへ向かうために、人やものに注意を向け、それに影響された存在としてあるという。長い生活史を経てきた要介護高齢者の日々の生活における「気遣い」の世界をあらわにしていくことで、ジェネラティヴィティの動機に光を当

\* 西南女学院大学保健福祉学部看護学科  
\*\*\* 元西南女学院大学保健福祉学部看護学科

\*\* 福岡県立大学人間社会学部

てていきたいと考える。この論文では、この動機をジェネラティブイティの源と捉えて取り組んだ。

本研究は、ハイデガーの解釈学的現象学を前提として高齢者の語りを聴き、要介護高齢者の「気遣い」の世界を解釈することを目的とした。

## II. 前提となるハイデガーの理論

ハイデガーは、解釈学的現象学を展開した「存在と時間」(Heidegger<sup>5)</sup>)において、「現存在」を「私たち自身がそのつどそれであるところの問うという存在可能性をもった存在者」と定義する。そして、自己の存在へと何らかの態度をとることができ、態度をとっている現存在を「実存」と呼ぶ。この現存在の平均的・日常的なあり方は、頹落しつつ開示され被投されつつ企投する世界内存在である。現存在のあり方には、本来性と非本来性がある。現存在の本来性とは、自己自身の存在を引き受け、自己の死へとかかわっているあり方である。それに対して、非本来性とは、自己自身を引き受けず自己の死から目を背けて、我を忘れて仕事に没頭したり生活を楽しんだりするあり方である。

そして、この「現存在」の存在構造の全体が「気遣い」(Sorge)と名づけられる。「気遣い」は、現存在のあらゆる心的態度や状態に先立ち、それらのうちに潜んでいる。時と場合によって、「気遣い」をしたりしなかったりするというのではなく、人間が存在していること、この世界で生きていること自体がつねにすでに「気遣い」なのである。

## III. 研究方法

本研究は、ハイデガーの解釈学的現象学を基盤とした、質的帰納的研究である。

### 1. 研究参加者

特別養護老人ホームに入所中で、要介護Ⅰ～Ⅲの認定を受けた高齢者とした。年齢相応の認知力を保持しており、自らの生活史や日々の生活に関する思いや考えを語る事が可能な状況にある者とした。

### 2. データ収集期間

データ収集は2014年6月より2014年12月の7か月間行った。

### 3. データ収集方法

研究者は事前に施設で予備研修を行い、複数の入所者とかかわりを持ち、研究参加候補者について施設スタッフと協議して、3名の候補者を決定した。研究参加の同意を得た3名のデータ収集を開始し、諸事情のため、最終的には2名となった。データ収集は、毎回、同一の研究者が、研究参加者の個室で行い、1回1時間前後の面接を1名につき10回行った。面接者は、ハイデガーの「気遣い」の概念を踏まえ、人が何に巻き込まれ、関与しているのかを意識した姿勢をとった。日々の何気ない会話からスタートし、研究参加者の人やものとのかかわりについて、語りを促す態度で臨み、引き出された話題に関心を持ち反応することで、さらに相手の反応を引き出し、流れを遮らないことを意識した。面接者の曖昧な投げかけや小さいひっかけから始まり、相手の反応如何でその都度、その後の会話の展開が方向づけられた。会話はICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

### 4. 分析方法

分析ステップは、Cohen, M. Z<sup>6)</sup>を参考にし、解釈の方法は、松葉、西村<sup>7)</sup>の考え方を基本とした。まずA氏、B氏の逐語録をナラティブテキストに再構築し、参加者が過去と現在を行き来するなかで語る、人やものへの向かい方やそれらとの結びつきをたどり、その意味を探り、そこで見出されたものに仮テーマをつけ、検討後に最終テーマを導き出した。解釈は、現象学の専門家を含む5名のグループで定期的に批判的検討を行った。A氏、B氏それぞれが語る文脈の絡み合いや両者の類似点や差異を検討し、語り全体の流れや構成を取り出すことをめざした。

### 5. 倫理的配慮

対象施設には研究の趣旨を説明し、文書で承諾を得た。研究参加者とその家族には研究の趣旨、研究への参加は自由意思であり、途中辞退も可能であること、得られた情報は本研究以外の目的で使用しないことについて口頭及び文書で説明し同意を得た。本研究は、西南女学院大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## IV. 結果

### 1. 要介護高齢者の「気遣い」の世界を解釈するにあたって

A氏、B氏の面接から解釈へと進むうちに、両者には、研究参加者決定時には意図していなかった共通項があることに気づいた。両者とも脳卒中後遺症で片麻痺という障害をもち、幼少時から神仏へのお参りに親しんだ体験をもち、豊かな人・ものとの交わり体験をもっていた。片麻痺という障害をもち、神仏参りをを行い、人・ものとの交わりをもつ、A氏・B氏の気遣いの世界として、A氏、B氏を比較しながら、A氏、B氏それぞれの「気遣い」の世界を解釈した。(以下に、テーマは【 】、補足は( )、参加者の言葉は<>、面接者の言葉は[ ]で示す。)

表 1. 研究参加者プロフィール

A氏	80歳代女性 要介護1 脳梗塞による右片麻痺 発症後10年以上経過 車椅子を自操して移動し、 ADLはほぼ自立している。 握力：右5kg、左20kg 下肢粗大筋力：左4、右測定困難 入所施設の近隣地域の出身
B氏	90歳代女性 要介護3 脳梗塞による左片麻痺 発症後10年以上経過 車椅子を介助で移動し、 ADL全般に一部介助を要する 握力：右10kg、左9kg 下肢粗大筋力：右3、左3 入所施設の近隣地域の出身

### 2. 要介護高齢者の「気遣い」の世界

#### 1) 片麻痺という障害をもつ要介護高齢者の気遣いの世界

【不自由さに直接働きかけ「役立つ自分」の可能性を探る】

A氏のなかでは、自分のからだの自由さと世間・人への貢献度が比例して捉えられる。したがって自分のからだの不自由さが増せば、世間・人への貢献度は低下する。世間・人への貢献度が低下すれば人間の生きる意味も薄らぐ。生きていくうちは何らかの形で世間や人に貢献するもの、という姿勢をもつ。「要介護」の状態を軽くするために、とてつもなく大きなエネルギーが注がれる。<自分のためだから> がんばれる、というのは、「要介護」の状態を改善することで人の役に立つ見通しがもてることを意味する。<朝昼晩手す

りにつかまって足を挙げるとかしてます。ここの廊下を往復30m(杖で)歩くんですよ、朝昼晩ね。あんまりね、人に迷惑かけたくないからね、そうしますけどね><自分ではよくわからないですけどね。でも人のことやない、自分のことだから続けるんよ。自分のことだから。一つでもよくなったら、と思って。まあまだなんか役に立つことがないかな、とか><この間ね、リハビリの先生が、Aさんこんなことになってから、こんなに動いたりする人は一人もおらんよ、って。…これ(オーバーテーブル)で手の曲げ伸ばししたりして。それからね、スーパーで洗濯ばさみを40個買って、かねの箱にずっと留めていくんですよ、毎晩してるんですよ、人には言わないけど。…40留めたら今度ははずしていく、それが済んだら曲げ伸ばしを100回して…><…あと2年と半年生きてたらもういつ死んでもいいねって、そう言って話すんですよ、それ以上まで生きたくないですよ。…あんまり世のためにならんでしょう。みんなに尽くしてもらえばっかりで…>

【人を喜ばす手だてが日常に溶け込み不自由さを超えていく】

B氏は、歌やお話という、人を喜ばす手だてが日常に駆使されて生活するなかで、自らの不自由さの感覚が遠のいてゆく。不自由さに直接働きかける行為はほとんどなく、不自由さをそのままの形で受け入れ、できることを際立たせる。ボタンのかけちがいを、よくあること、と言って気に留めず、声が出なくとも歌の歌詞を覚えているから構わないとする。<わたしは右足1本で何でもできるんよ。トイレに行っちゃんと立ちなさいって言われたら、左はいうこと効かんけど、右足があるから立ちきるけね。(スタッフが)右足1本でよう立つなあ、上等、上等って言ってくれればうれしいけどなあ><(ボタンがずれていて)こっちの手がつまらんけな、片方でするから。外れたらもうしたくもないし。そんなことはよくあること><左手は力がない。タオル落としても左手ではとりきらん。ま、でも歌を歌いきるから、いいわ><お医者さんが、あんたは符(運)がよかったよ、左がやられていて、右が残ってるからお話ができるからよかったねって。(頭を指して)この辺が残ってるから、民謡も覚えているし、子供の時から、ああなってこうなって、とかそんななんもわかるとるしな><[発作後声が出なかった時は?]いやあそれは声は出らんけどな、自分では繰り返し繰り返し(頭の中で)してみるよな。東京音頭とか自分の頭に入ったのを思い出して(頭の中で)歌

いよったよ>< [有名人ですね?] 有名人。歌うけな。ここでもご飯食べよったらね、歌うおばちゃんやね、と…。どこに行っても、ソーラン節とか、自分の十八番はばっと出る>< (B氏の人を惹く話術の例として) 昨日お寺さんが来て…歌も歌うし、口説きもしたし…人間、生きていくうちに苦しいことが起こってもな、(抑揚つけて) サ、ヨイサ、ヨイサ、ヨイサ、ヨイサ、ア、ドッコイ、ドッコイヨって、坊さんも都合よく口説いた…> (という調子で、会話にお囃子やお経が張りのあるリズムカルな声で組み込まれ、まるで小咄を聞いているよう)

## 2) 神仏へのお参りを行う要介護高齢者の気遣いの世界

【神仏へのお勤めがもたらす安堵と揺らぎの日々を生きる】

A氏は、地域や身内が続ける神仏の世話を幼少時より自然に受け入れ、若い頃よりお寺や神社のお世話を続け、施設で生活する今も、毎日神仏へのお参りを欠かさない。しかし障害を負った事実や、息子が神仏の世話に本腰を入れないことが心にひっかかる。神仏を大事にしてきた私がなぜこんなめにあうのか、でも命は救われた、自分の思いはなぜ息子に伝わらないのか、子育てを間違ったのか等、気持ちが日々揺れ動く。命は救われたものの、自分は平均寿命まで生きたら十分と思うが、100歳を過ぎる母を残しては死ねない。毎日神仏に祈ることがA氏の安堵であり、同時に葛藤を生み出す。<(施設の窓越しから) 日蓮宗のおひさま、お伊勢さまの方向、もう一つは子供がお参りしてくれたお寺…氏神様と。ここからお参りするんですよ。それが済んでから、十一面観音様、お神様のみそぎのことばを唱えて、お正信偈唱えて、ご飯。早くから起きてないと間に合わないでしょ><お参りは何十年とやっていました。…昔はテレビも何もないから、お参りすることがなぐさめだったのではないですか><日常の、参ることに抵抗がない。この間友達に来て…今までお参りして…それがね、ずっと今につながってね。その時ひょっとしたら亡くなっとなったかもしれんよ。でもそれがあんなの今を形成してるんよ。今まで一生懸命してきたから助かったんかもしれんよ、と。そう言われて、そうかね、一生懸命したのにこんなことになって。(と言うと) 友達があんな、変なこと言いなさんなって…><子供にね、お寺さんに参ったら?って言ったんですよ。そしたら僕は70になったら参ると。…あんな、それまで(お寺を) お守りせんの?って…

私、そんなこと教えてないんやけど、って…。私はあんなたちが学校に行きよる時におやつは仏様にお参りしてからお上がりなさいって育てたつもりよ。親の姿見て子は育つというけど違うなあと思って。育て方間違っとなつたかなってね><今日も母が元気でられますようにと、朝お願いしたんですよ…私の心も複雑ですよ。(母に) いつまでも生きててもらいたいですね。でも私より先に死んでもらわないと困る。私が見届けてね、と思って>

### 【お説教が歌・芝居へと連なり花開く日々を生きる】

B氏は幼い頃母と通ったお寺参りが心に残るが、そのお寺参りは、いつのまにか歌や芝居にとって代わる。人に話を聞かせて人が救われるというのがどんなによいことかと幼な心ながらに思う。いつのまにか人にお話をするのが好きになる。それが歌や芝居をすることに展開してゆく。施設で僧侶のお説教があると、幼い頃慣れ親しんだ心でお説教を聴き、「御文章」を大きな声で唱える。施設で歌うと、皆に歌うおばちゃんと声をかけられ、自分の道楽が花開いて今、役に立っていると思う。お寺が好きな自分や身内は符がいい、眼の手術がうまくいったらあと100歳まで生きようと思う。<うちがた親がお寺参りが好きけな…お寺に参ったらあられをくれるやろ、そのあられがまた美味しいでな。お母さんがお寺に行くと言ったら、チャンチャン、チャンチャンついて行きよったな><お寺に行くとい休さんの話とか聞いて…小学校に行くと皆に話すよ…子供の時から声だけは大きかったんじゃろな…先生がBさん、一休さんの話、と言やあ(頼まれれば)、私もはいはいて飛んで行って…><(母が、幼い頃死んだ妹の墓参りの行き帰りに「なむあみだぶつ」と) 唱えてな、それを(母は) 自分の明かりというか、それを言うたら前が見えるという感じやったかなあと、わたしは今そう思うよ…うん、親がそれで辛抱したのを見てきちよるからな、ああ(お寺のお客僧さんのように) お話ができる人になったらどんなにいいかな、と思うたりしてな>(この間の式典の時) 私が歌うっていうたらそこに皆ドンドン、ドンドンやってきて(拍手する身ぶり) いっぱい応援してもろた…そいけな、まあまあいろいろあろうけど、私は自分の道楽が花咲いて今役に立ちよらあとと思うたりしてな><わたしがお寺参りが好きってというのは(子供は) 思うやろな…(子供は皆) 符がいいで。けがなく育て、わたしは符がよかっただいて思う><白内障の手術が終わって無事にここにもどってくりゃ、あと100まで生きる…葬

式という50万や100万は要るけな、ちょっとやそつとでは死なれんなあ>

### 3) 人・ものとの交わりをもつ要介護高齢者の気遣いの世界

【「自分が通ってきた道」と「要らぬ世話」との隔たりを生きる】

A氏の会話に度々繰り返される「自分が通ってきた道」とは単にどういう道を通ってきたかではない。課せられた社会的活動を、人に支えられ中心となっていく、隣近所の皆と助け合い、寺のお勤めでは年寄りを立て、教えを乞うてきた道である。人は助け合い、すべきことをやるものであるという強い芯の上に道が成り立つ。その都度与えられた課題に自分がどう向かい、何を学んだかまでを意味する。A氏の「自分が通ってきた道」は、これまで人への世話と人から世話されることの均衡が保たれていた。しかし時代の変化と、自らが要介護の身になって、その道を拠り所に人の世話をすることに限界が生じる。人の役に立ちたい、それが人には「要らぬ世話」になる、という両者の間を行き来して生きる。

<(長年婦人会の会長をして) 皆がよく協力してくれました。…参謀がえらかったら殿様は馬鹿でもいいんよって言っていました。皆が居るからできるんよって…そんなん言われたらなおついて行かなね、と><自分が通った道だから。何回もそう思うことがあります><【どの人にも親しむ?】 別にそんなあれがないですよ。もうそれなり入っていきけるんですよ。大丈夫ではないけど、大丈夫にせないけんやないですか。仲間になれんやないですか><昔は(体調が)悪かったら、「どおお?」ってなんか持って行ってましたからねえ。隣近所でお漬け物が「美味しいよ」って配る…、ごちそうができたら「ちょっと寄って行かん?」とか言う。今はそういうのがないでしょ?><(お寺の手伝いで) 火の燃やし方とかあるので、「おばちゃん、教えて」って言ってたんですけど、今はそんなことない。年寄りを立ててね、教えてくださいっていうのがない><(他の入所者に) あんた、大丈夫? また詰めよるのやない? っていつも言うんですよ。(頭をのけぞらせて) こうして寝て食べるんですよ。あんた起きなさいって世話焼くんです。…また寝るとよと言うと、要らん世話焼かんでって言われるんですよ><[スタッフへの助言とかは?] したことは何度かあるけど。あまり世話焼くわけにはいかんでしょ、ベテランさんだから。

…まあいいほうに解釈してくれればいいけど…こっちは素人ですよ。自分で通ってきた道を言うんですけどね。あんまりそんなことは言いません><皆でご飯食べる前に(誤嚥予防の発声) パ・タ・カ・ラを大きな声出して言ったらいいことはないですかってリーダーに言って、ちょっとでしゃばったかなって思いました。…ミスったかなと。リーダーが言わないのに私が言って悪かったかなあと思ったら、後でリーダーが、あれは何だったかと(再度) 聞きに来たから(それを聞いて) ああ、よかったかなあと。>

【「姫女苑」に連なるものや人とのふれあいを味わう】

A氏は長年俳句や詩吟を習ってきたが、自作の俳句をきっかけにして会話が進むと、そこに登場するものや人は、A氏の口から格別生き生きと語られる。ヒメジョオンは漢字で書く姫女苑の方がよいと面接者と共有し、掛け合うように会話がはずむ。「自分の通ってきた道」や「お勤め」から生じる揺らぎや葛藤がほとんどなく、そこにはさまざまなものや人とのふれあいを楽しみ味わうA氏が居る。<(自作の「グランドに揺れる姫女苑」から俳句作りの話) 小さいところに気がつくんですよ。…すずめが留まっていますね、仲良きころ、ささやくみたいなことをするんですよ。そしてすっと飛んでいくんですよ。恋のささやきかな、とか思って、そういう歌をこの間作りました。郵便で。82円とつとかなないとね…先生が添削して、また違う先生がここに持ってきてくれる、仲間だから。><ここの(窓越しの) 姫女苑、こんなにたくさんなっていましたよ…あれもかわいいですよ、字がかわいいですね。…[野の花も名前知ってたほうが楽しいですね?] 楽しいですね。シャガがあるでしょ。生け花で(この間)使って。それ珍しいって言われたけど、そんなの山にいっぱいあるって言いました。<(窓際に手作りの風鈴が掛けてあって) どこに置くって言うから、そこにぶら下げてって頼んだんですよ。書道でさわやかな風って書いたんですよ。(スタッフの男性に) 金魚描いてって頼んだんですよ。[金魚がなかなかいい。元気がいい] 金魚上手ですよ。金魚がなかなかいいでしょ。[青空と一緒に見るといいですね。] ちょうどいい。金魚が泳いでいるようにあるでしょ。北海道に行った時、風鈴の工場があっておみやげに買って帰って…生きていようにあるでしょ、くるくる回ると(後の自作俳句は「風鈴の金魚鳴るたび踊り出す」>

## 【「好き」が自ずと人とつながる日々を生きる】

B氏の「好き」は、人にお話を聞かせること、歌・芝居であるが、その背景に、母に連れられお寺参りをし、母がお説教やお経を唱えることで救われたという体験をもつ。歌が好き、という話の中に、歌った時の相手の反応が必ず出てくる。日々におしゃべりを面白おかしくする演出が不自然でなく入り、それが習慣化した生活を送る。歌や芝居による人との再会や施設でのふれあいが続く。B氏はそうしてごく自然に人とつながる生を生きる。<[慰問は大変だったのでは?] わたしはね歌を歌うのが好きだから平気、楽しかったよ><施設に行ったら私が歌ったら[ああ、東京音頭を?] うん…歌ったら皆立ち上がってきて踊ったんよ。…一人残らず踊ったんよ><(同じく慰問団に居た弟がここに慰問に来て「南京玉簾」をやって)途中で歌を忘れて(私が会場席から)「ア、サテ、ア、サテ、サテサテサテ南京玉簾」って応援してやったら、みんなが「応援もがんばれ」って><(津軽三味線の演奏もあって)津軽三味線はな、ボン、ボン、ボンボンボコボコって鳴ったら血が踊る感じがするな。[津軽三味線はしゃきってしてますね?] しゃきってしとう。皆がそろると、(身体を縦にふって)ヨイショ、ヨイショ、ヨイショって身体が飛び上がる感じがする。いつも(身体を縮めて)じっとこんなふうにしとる(入所者の)人は身体を起こす気持ちになるなあとと思うたりして><あの人(入所者)もあんまりわからん(認知力の低下)。わからんけど、歌が始まったら目の色変えて聞く気があるけな。…自分では歌わんけど、やっぱ若い時にカラオケいっぱい行っとるから、歌をいっぱい覚えとるんじゃろうねえって思う>

## V. 考 察

## 1. 要介護高齢者の気遣いの世界と祖父母的ジェネラティヴィティの源

高齢者が要介護状態で生きる気遣いの世界とはどのようなものなのか。A氏は、発症から10年以上経過した今も、麻痺した上下肢の訓練を独自のメニューで、日々ひたすら続ける。A氏の、続けるのは「自分のためだから」という源には、「自分の通ってきた道」が息づく。社会的課題を果たし、長年皆と助け合い、何らかの形で人の役に立ってきた道がまさにA氏の「自分の通ってきた道」である。A氏にとっては、要介護状態の進行は人の役に立てない自分に結びつく。B氏も

片麻痺があり、介護度はA氏よりも高いが、B氏は麻痺した上下肢への直接の働きかけはない。要介護の状態であっても、歌が歌え、話ができる。B氏にとっての歌や話は、聞いた相手が喜んでくれることに帰結し、そこに意味を成す。それはB氏の幼少時に母がお説教で救われた体験から、話すことで人が救われたらどんなによいだろう、と思いつけたことが影響している。A氏の訓練の日々は、「役立つ自分」の可能性を探る日々と解釈でき、またB氏の歌やおしゃべりは、身体的不自由さを超える働きをもつと解釈することができる。これらは、彼女らのジェネラティヴィティの源に在る。A氏の場合、人から課せられたものは果たすべきで、自分にとってもそれが第一という、人の役に立ちたいという欲求をもち、B氏には人を喜ばせたいという長年にわたる内的希求がある。J. M. エリクソン<sup>8)</sup>は、老年期にも生き生きした関わり合いをもつことができ、社会からの引退後の、「携わらないが、関与し続ける」ことの可能性を示唆している。要介護状態では、自らが必要とされるニードを満たすことに、以前と同じように携わることはできないが、個々の在り方でそれに関与し続けることは可能であると考ええる。しかし、それには、ケア提供者の側面的支援が必要となる。まず次世代に引き継ぐ関心や行動の源となる個々の高齢者の内的希求を見出すことが重要となる。

## 2. 要介護高齢者のジェネラティヴィティ発達をめざす介入の可能性

高齢者のジェネラティヴィティ発達については、語りによる高齢者の自己再構築の意義を説くもの(坂本<sup>9)</sup>)や、若年世代による高齢者の生活史の聴き取りがジェネラティヴィティを高める(Ehlman<sup>10)</sup>)、またジェネラティヴィティの発達によって高齢者の利他的行動意欲が高まる(田淵、権藤<sup>11)</sup>)等の文献がある。しかし、小澤<sup>12)</sup>が、老年期という発達段階に固有のジェネラティヴィティの経験のあり方を解明する枠組は不十分であると指摘するように、他者の助けなしには生活が成り立たなくなる状況におけるジェネラティヴィティのありようは十分に解明されていない。深瀬、岡本<sup>13)</sup>は、中年期から老年期に至る世代継承性変容の特徴を、死や世界からの引退からくる「残すことへの使命感」の強さと同時に「残せない不全感」の存在を挙げている。深瀬のいう「残せない不全感」は、要介護状況に置かれた高齢者に、ジェネラティヴィティ発達の視点からの意図的な介入が行われなかった場合に容易に陥りやすい発達の危機と考えられる。したがっ

て、要介護高齢者の内的希求に働きかけ、それを維持することへの支援が必要である。毎朝施設の窓際に立ち、神仏へのお参りを行う行為の意味や歌やおしゃべりが幼少時の母とのお寺参りに由来することが、ケア提供者によって理解されることで、介入の質は変わり得る。神仏参りが心の平安と同時に心の揺れをもたらししていることや歌やおしゃべりが、聴く相手を救う働きをもつことなどをイメージしながらの日々のかかわりは、要介護者とケア提供者相互の生き生きした関係性を築く可能性を広げるであろう。

### 3. 看護への示唆

本研究では、要介護高齢者の気遣いの世界をあらわにすることで、ジェネラティヴィティの源に光を当てたが、これは要介護高齢者のみつめ方の根本的な捉え直しを図ることに関わる。ハイデガーは、現存在は、過去に根ざし、現在において存在しつつも、つねにすでに未来へと開かれているとして、人間の気遣いのありようを解釈しようとするが、それをそのまま要介護高齢者のみつめ方に生かすと、要介護高齢者の過去・現在・未来は分断されずのみつめられる。施設入所高齢者は「輝いていた」ときと「輝かない」今をもつ(沖中<sup>14)</sup>)という一側面はある。しかし、輝いていたときも輝かない今も含めて存在者として生きている。A氏は「自分の通ってきた道」と「要らぬ世話」の間で葛藤はあるのだが、ひとたび俳句という入り口から彼女の気遣いのありようを覗くと、人やものとの交わりが生き生きと語られ始める。ここにA氏の自我発達の可能性が出現する。原<sup>15)</sup>は、介護施設でライフヒストリーを聴き取ることによるスタッフの認識の変化がケアの質の向上をもたらすと述べている。本論文では、その認識の変化の一つとして、看護者が、要介護高齢者の自我発達の可能性に結びつくような、生き生きした側面を発見することの重要性を示している。(この論文は、平成24～26年度科学研究費基盤研究(C)24616026の助成を受けて行なわれた研究の一部である。)

### 引用文献

- 1) Erikson. E. H., Erikson. J.M, Kivnick. H. Q: Vital Involvement in Old Age, 352, W. W. Norton & Company, New York, 1986
- 2) Kahana E, Bhatta T, Lovegreen LD, Kahana B, Midlarsky E. : Altruism, helping, and volunteering: pathways to well-being in late life. *Journal of Aging and Health.*, 25(1), 159-187, 2013
- 3) Bickerstaff KA, Grasser CM, McCabe B. : How elderly nursing home residents transcend losses of later life. *Holistic Nursing Practice.*, 17(3), 159 -165, 2003
- 4) McAdams, D. P. & de St. Aubin. E. (Eds.) : The anatomy of generativity, *Generativity and adult development*, 7-43, American Psychological Association, Washington, D.C., 1998
- 5) Heidegger M. : *Sein und Zeit*, 15 Auflage 2 Druck, 445, Max Niemeyer, Tübingen, 1984
- 6) Cohen. M. Z., Karn. D. L., Steeves R. H., 大久保 功子訳 : 解釈学的現象学による看護研究—インタビュー事例を用いた実践ガイド—105-134, 日本看護協会, 2005
- 7) 松葉祥一, 西村ユミ編 : 現象学的看護研究—理論と分析の実際, 210, 医学書院, 2014
- 8) Erikson, E.H., Erikson. J.M. : *The Life Cycle Completed-Extended Version*, 134, Norton & Company, New York, 1997
- 9) 坂本陽子 : 高齢期の社会化における「語り」の意義, *文教大学付属教育研究所紀要*, 14, 73-78, 2005
- 10) Ehlman. K., Ligon. M., Moriello. G. : The impact of intergenerational oral history on perceived Generativity in older adults, *Journal of Intergenerational Relationships*, 12, 40-53, 2014
- 11) 田淵恵, 権藤恭之 : 高齢者の次世代に対する利他的行動意欲における世代性の影響, *心理学研究*, 82-4, 392-398, 2011
- 12) 小澤義雄 : 老年期の Generativity 研究の課題—その心理社会的適応メカニズムの解明に向けて, *老年社会学*, 34 (1), 46-56, 2012
- 13) 深瀬裕子, 岡本祐子 : 中年期から老年期に至る世代継承性の変容, *広島大学大学院教育学研究科紀要*, 3(59), 145-152, 2010
- 14) 沖中由美 : 身体障害とともに老いを生きる施設入所者の自己意識, *日本看護科学会誌*, 26(4), 19-29, 2006
- 15) 原祥子, 小野光美, 沼本教子他 : 介護施設利用者のライフヒストリーをケアスタッフが聴き取ることの意味—ケアスタッフの高齢者およびケアに対する認識の変化に焦点を当てて, *老年看護学*, 11(1), 21-29, 2006

## Frail Elderly's Narratives of "Caring" : Research on the Foundation of Grand-Generativity

Mariko Araki \*, Eiji Kamiya\*\*, Reiko Azuma\*\*\*,  
Etsuko Yoshihara \*, Yasuko Maruyama\*

### < Abstract >

The present study is aimed at clarifying the frail elderly's narratives of "Caring" and was intended to explore the foundation of "grand-generativity". Two elderly women were interviewed in the nursing facility where they reside. From the perspective of Heidegger's hermeneutic phenomenology, data was analyzed using Cohen's qualitative inductive research method. The results revealed seven themes related to physical disability. The Frail elderly's narratives of "Caring" showed the original being shaped by communal involvement during their life histories.

Keywords: care, frail elderly, generativity, hermeneutic phenomenology

---

\* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University

\*\* School of Human and Social Sciences, Fukuoka Prefectural University

\*\*\* Formerly Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Seinan Jo Gakuin University